

「言語研究センターの現在と未来」

松村文芳

言語研究センターの運営に参加して半年が過ぎました。暑くなってもエアコンが入らないような問題もありましたが、学生が健康を損うような事件もなく無事すごすことができました。これはひとえに事務局の係員の皆様が創意工夫で熱対策をされたおかげであり、LL教室で授業された先生方の忍耐のおかげであります。厚く御礼申し上げます。

幸い本年もLL教室等の言語研究センターが責任を負っている教室は稼働率がよく、先生方にもまた学生の皆さんにも快適な環境を提供できております。学習環境をたえず改善するため、先生方や学生の皆さんの御意見を事務局や運営委員の先生方にお寄せください。言語研究センターは学生、教員、事務職員がユーザー、利用者、管理者の立場から協同して運営している組織であり、大学内の組織として理想的な形態を取っています。従って当センターを運営する中心である運営委員会の責任は他の誰にも転嫁できないものであります。

御存知のように本学にはいくつかの研究所があり、それぞれが運営委員会を中心に自主的に活動しており、言語研究センターもその中のひとつとして長年の試行錯誤を通して現在の姿を確立しています。言語研究センターが他の研究所と異なるのは学生と教学上直接接していることであります。接点は教員と学生であり、教育設備等の利用や改善を進める直接の責任を負うのは教員であります。従って教員の教

育研究と設備の問題はきりはなせない関係にあります。言語研究センターの未来は学生、教員、事務職員が相互の役割をよく自覚して、自主的に発展させるよう努力することの中にのみあります。

私は長くLL教室を使用してきましたが、現在は使用していません。現在の担当科目がLL教室のような設備を必要としないからです。1クラスの学生数が27名ですので、一人ずつ、徹底的に個人指導が可能であるためです。大学に入学してはじめて学習する外国語は最初の一年間が決定的です。これは一歳から四、五歳までの幼児が親の言語を修得するのに似て、言語が確定される時期にあたります。したがってこの期間に正確な指導を受けることは新入生にとって決定的に重要です。中国語には音の高低変化を一音節の中にもつ「声調」があります。子音と母音だけで音節を構成する言語の場合はまだ矯正ができますが、「声調」は一定時期（おそらく一年半位）をすぎると矯正できなくなります。

私は何度か三、四年生と大学院生の声調を矯正しようところみましたができませんでした。おそらく子音、母音とは異なる脳のメカニズムが働いているのでしょう。私の科目は高度な機器を使用するところまでは必要なく、生徒が私の唇をみつめ、発声される音をじかに聴きながら何度も何度も訂正をくりかえす極めて古典的方法を採用しています。